

SSKW

海から海へ

No. 38 2015. 3. 29【編集人】

特定非営利活動法人 海から海へ

〒182-0024 東京都調布市布田1-32-5

マートルコート調布407

Tel 042-441-2958 Fax 042-497-4878

<http://umi.or.jp> office@umi.or.jp



よそのとり Hens of Someone Else 380x455 1985 © Mizuki Tanaka

海から海へは、障がいをもつ人から渡される豊富なものの存在に気づき、人々と共有するため、障がいをもつ人を中心とした、文化芸術活動、研究活動、社会教育活動、心理カウンセリングなどの支援活動を行うこと、および、それらの活動を通し、障がいの有無にかかわらず、地域・国内・国外を問わず広く交流を深め、人々がより良く生きることに貢献することを目的として活動しています。

**みなとのこども診療所オープン記念
田中瑞木展
2014年8月1日~12月27日**

上記展覧会は無事終了いたしました。
展覧会を通してさまざまな出会いがありました。
お世話になった方々から
メッセージをいただきました。

「瑞木さんへ」

みなとのこども診療所 医師 今西宏之



2014年に診療所がスタートして半年。「発達支援をメインとした小児科・児童精神科」という神戸では新しい挑戦ですが、役所の新規開業の指導も終わり、何とか続けていけそうな目途が立ちました。患者さんもスタッフも帰ってしまった診療所（自宅に自分の部屋がない自分が一人で静かに過ごす秘密基地でもあります）で一人、書いています。

開業当初の展覧会の申し出、本当にありがとうございました。来院された家族、訪問された見学者の方に、瑞木さんの作品が我々の診療所の進んでいきたい方向を、言葉でない形で伝えきっていただいたと感じています。理屈ばかりでない伝え方ができたのは本当に良かったなあと感じています。

思い起こせば2006年、神戸の王子市民ギャラリーで行われた瑞木さんの第13回の個展に行きませんか、と気の優しい開業医の武田先生に誘ってもらったのが出会いだったでしょうか。

その頃の自分は、4歳になった自閉症の娘と自分の将来の方向について模索していました。「大学院で未熟児や白血病

のこどもたちの診療・研究を続けたものか」「妻と2人のこどもとの時間を大切にしたものか」「海外留学でもして娘に新しいことをやらせてみようか」「家族に自閉症児がいるからこそできる発達支援の診療をするのはどうか」「それとも沖縄にでも移住してゆっくり暮らそうか」大学院を休学してみたり、とにかく将来の方向を決めかねていました。そんな中、見に行った瑞木さんの個展でしたが、忘れられないシーンがありました。

いつも通り見通しがつかなくてパニック・大泣きとなっていた娘に対して、「私もこんな時期があったわ」とでも語るように、瑞木さんが娘を優しい眼差しで見つめていたのです。あの瞬間、自分が娘を育てていく上で、一つの目標ができたように思いました。

それから自分は大学院へ戻り博士号を取得、その後は大学を離れ、重症心身障害児施設で身体障害・知的障害・発達障害を持つこどもたちの診療に5年程従事しました。

比較的困りごとが明らかな重症の身体障害児さんを取り巻く環境は充実していくものの、困りごとが周囲に伝わりにくい知的・発達障害児さんの医療・福祉はなかなか進みませんでした。診断をする医療機関は少しずつ増えているものの、療育支援を提供する医療機関は少なく、神戸市ではとうとう療育の待機が1年半となってしまいました。そうした中、人里離れた場所ではない街中で通える発達支援の診療所を提案していくことを決心し、今に至ります。

うちも1年過ぎれば少し落ち着くでしょうか。その頃には家族やスタッフを連れて「田中瑞木美術館」へも再訪したいと思います。当診療所に預かせてもらっていた作品ともまた再会できることを楽しみに。また方向に悩んだ時には相談させてもらおうと思います。

本当にありがとうございました。



武田医院 医師 武田浩一郎・比早子

12月27日、田中瑞木さんの絵が「みなとのこども診療所」から瑞木さんのもとへ帰っていく日、私は5ヶ月ぶりに診

療所におじゃましました。なんとびっくり、7月31日には「今から始まるよ。」という静かなエネルギーが感じられていたのですが、12月27日は絵と診療所が一体となって躍動している感じになっていました。

絵も最初は緊張していたのかな？

5ヶ月間毎日たくさんの子供たち、お母さんたち、一緒に来てくれる人、スタッフのみなさん、そして今西先生に、安らぎとエネルギーをいっぱいいっぱいくれてきたんだとわかりました。

今西先生も、「長い間お待たせした患者さんもピリピリした感じがなく診察室に入ってきてくれました。」とおっしゃっていましたが、瑞木さんの絵を見ていると、待っている時間があっという間に過ぎて、心の中の不安が小さくなっていったのだと思います。

絵の下についているお母さんの愛子さんの解説も素敵！最後にもう一度と、絵をゆっくり何回も見ても解説を読んでいたなら、なぜか訳も分からず涙がでてとまらなくなりました。とても気持ちのいい涙でした。

年末まであわただしく診療をして、家のこと家族のこともあり、自分でも気がつかないうちに緊張して疲れていたのでしょう。それが一気にゆるんだ感じでした。癒されてほっとしました。

そうしていたら隣に座っていた瑞木さんが私をしっかりとハグしてくれました。さらに強いやすらぎと暖かさに包まれて肩の力が抜けるのがわかりました。その後も、絵を車の中に積みお手伝いをさせてくださいと言いながら、瑞木さんの横でぼーっと絵を見していました。とても幸せでした。

その夜、瑞木さん、阿部公輝、愛子さんご夫婦、今西先生ご家族と私たち夫婦で夕食をご一緒させていただきました。主人は公輝さんがしてくださるいろいろなお話や言葉掛けに感激していました。ありがとうございます！今西先生の娘さんのまりちゃんのかわいらしさ、息子さんのりんくんのユニークさとたくましいこと。それに今西先生の美しい奥さんは、私の小学校の後輩でもありました。とても楽しい時間を過ごさせていただきました。

瑞木さんご家族と初めてお会いしたのは阪神大震災から10年目ということで神戸で行われたフォーラムの時でした。今あれから10年がたって、震災20年目になります。不思議なご縁を感じます。

今から20年前、私たち夫婦は5歳の双子の息子と3歳の娘を連れて、焼けていく自宅兼診療所からパジャマ姿で逃げていきました。それは開業する2週間前でした。

でも、そのことがあったから瑞木さんたちとの出会いがありました。そう思うとご縁はとても不思議なものですね。絶望は勘違い。



瑞木さん、今度は東京に絵を観に行きたいと思っています。また阿部さんご夫婦のお話を聴かせてください。またお会いできるのを楽しみにしています。いつもありがとうございます。(執筆 比早子先生)

みなとのこども診療所 作業療法士 生田暢彦

この度は、私たちの診療所のオープンに際し、貴重な瑞木さんの作品で花を添えていただき本当にありがとうございました。

床も壁も木目調のシンプルで落ち着いた雰囲気のリビーはできたての緊張感に満ちていたかもしれません。それが瑞木さんの明るく、力強く、あたたかい作品のおかげで体温を得て、春の息吹に触れたようでした。私たちスタッフもこれからどういう船出になるのかドキドキハラハラの気持ちでしたし、来院されたお子さん、ご両親のお心はその何倍も緊張に満ちていたでしょう。ピカピカの診療所に集まったそうしたたくさんの方の力強い気持ちをまあるくしていただきました。

ある絵の前で、ひとりのお母さんがじっと絵を見つめて立ちつくされていました。それは、オープンして3~4ヶ月経った頃で、そのお母さんも何度も診療所に来られていました。すでに何度も同じ絵をご覧になられていたと思います。お声かけしようとも思ったのですが、そんな余裕もなくそのときは過ぎました。今から思えば下手なお声かけなんてしなくてよかったと思っています。そのお母さんはきっと、絵と対話をされていたのだと思います。どのような内容なのかは想像すらできませんが、人ではなく、言葉ではなく、絵との対話を選ばれたお母さんの心情は何となくですが推し量ることができます。

そういう意味では、瑞木さんの絵もまた、診療所の船出を共にしたクルーだったのかなと思えてきます。今はその仲間たちは別の航海の準備中なのでしょう。船出した私た

ちの航海をどこかで見守っていただけたら幸いです。

素敵な仲間をおくっていただいたご両親、スタッフの方、そして彼らの生みの親の瑞木さんにあらためて感謝申し上げます。

みなとのこども診療所 臨床心理士 本田真知子

保護者の方から、いくつか直接感想をお聞きする機会がありました。

ある保護者の方は、「病院の雰囲気にならぬに溶け込んでいて、ほっとできるような感じ。自分のこどもにも好きなことを見つけて伸ばしてあげたい。」とおっしゃっておられました。

また、ある保護者の方は、「動物の絵の毛並みがすごく細くてよく観察しているなあと感じました。どの絵もたくさん色を使っていて、カラフルで素敵です。特に花火の色使いが最高です。どの絵もよく観察して描いていて絵がすごく好きなんだな一つすごく感じました。自分の子もこれから先、大好きになって、集中できるものを見つけて、趣味や仕事に繋がってくれたらなあと思いました。」とお話してくれていました。

他の保護者の方も、「こんな才能があって才能を伸ばせたらいいなあ。わが子はどんな才能があって、伸ばせているかな。見つけてあげられるかな。見つけてあげられるかな。と初めて見た時に思いました。そして、それを認めてもらえる支援者に巡り合えるなんて素敵と思いました。」と教えてくださいました。

多くの保護者の方が、ご自分とご自分のお子様との関係に思いをはせられているのだなと改めて感じています。

瑞木さんの絵が美術館の方へ移動した後の1月に、みなとのこども診療所に来られた方々は、絵がないことに気づき、「わー。絵がない。」と驚かれた方が多くいらっしゃいました。みなさん、絵がないことをとても寂しく感じておられました。

私個人的には、自転車の絵が大好きでした。説明文を読む中で、自分自身のこども時代を懐かしく思い出していました。力強い絵からは迷いがなく、自分の好きなものに一生懸命向かう瑞木さんが思い起こされ、ずいぶん励まされました。これからも、自分の好きなものに一生懸命の瑞木さんの姿、そして、これから出会うたくさんのおこどもたちが好きなものに夢中になれる姿を思い描き、私も頑張っていきたいなと思います。

本当にありがとうございました。

みなとのこども診療所 言語聴覚士 片岡 裕統

私は言語聴覚士として言葉がまだ出ていない子供たちとの療育の時間を共に過ごす中で、コミュニケーションには伝えられる側の感受性というものがいかに重要なファクターを占めることかを感じさせられています。感受性とは、相手の心の中を想像することであり、相手の立場に立つことであると思います。また、コミュニケーションのツールは言葉だけではなく、絵もそのひとつです。

瑞木さんの絵は、他者を見つめ、他者(動物)の視点に立ち、他者の気持ちになり描かれているように私には感じました。瑞木さんの豊かな感受性が表現されている。時に、自閉症児・者は人の気持ちや人の感情を理解していないように見えることもありますが、それを表現する術にたずさきがあることを私たちは瑞木さんの絵から気づかされます。

彼女の絵を通して、伝えられる側の私たちの感受性こそがこれからの自閉症児・者とともに生きていく上で大切なことであることに気づいていくきっかけになることを願っています。

編集後記

春になりました。陽光が辺りを明るく暖かくしてくれます。皆様の感想を読ませていただきました。誰かの心にそっと寄り添い、ふわっと暖め、身体を楽にしてくれる瑞木の絵は春のようなかなと思います。

2回の神戸再訪を楽しんだ画家は相変わらず絵筆を持つとしませんが、作品が大勢の方に観られているという自覚を強く持っています。絵の世界が誰かの役に立っているという気持ちは彼女を安心させているようにも見えます。絵という羅針盤は健在のようです。

そのうち、「絵を描く」という彼女の声が聞こえるような気がするのです。今はともかく待ちましょ。(愛)

特定非営利活動法人 海から海へ

<http://umi.or.jp> office@umi.or.jp

振込口座 ゆうちょ振替 : 00110-0-684539

みずほ銀行 調布支店 普通預金 8082621

2015年3月29日 海から海へ No. 38

編集責任者 阿部公輝

〒182-0024 東京都調布市布田 1-32-5

マートルコート調布 407

Tel 042-441-2958 Fax 042-497-4878

発行所 〒157-0073 東京都世田谷区砩 6-26-21

特定非営利活動法人障害者団体定期刊行物協会

定価 200 円